

## 推薦図書

堀尾 正毅(「地域に根ざした脱温暖化・環境共生社会」領域総括・東京農工大学名誉教授)

### 温暖化対策・環境・エネルギー問題

西岡秀三編著、日本低炭素社会のシナリオ 二酸化炭素 70%削減の道筋、日刊工業新聞社、2400 円

国立環境研究所「2050 日本低炭素社会」プロジェクトのリーダーとしてまとめた労作。  
日本エネルギー学会編シリーズ 21 世紀のエネルギー、コロナ社  
特に、

佐伯康治 物質文明を超えて 資源・環境革命の 21 世紀 、2100 円

十市勉ほか、エネルギーと国の役割、1785 円

JOGMEC 調査部、石油資源の行方 石油資源はあとどれくらいあるのか 、2415 円

田中敦夫氏の本：

日本の森はなぜ危機なのか 環境と経済の新林業レポート、平凡社新書 133、 798 円

森林からのニッポン再生、平凡社新書 380、 780 円

田中氏は静岡大学農学部林学科出身のジャーナリスト。

現実的な林業論は説得力を持つ。

David J. Hess, Localist Movements in a Global Economy, Sustainability, Justice and Urban Developments in the United States, The MIT Press, 2009

### 地方分権・金融経済危機・地域活動論

水野和夫、人々はなぜグローバル経済の本質を見誤るのか、日本経済新聞出版社、2007、2200 円

2008 の危機を言い当てていた。

帯：「帝国化・金融化・二極化する世界! 一国単位ではもう何も見えない!」

西尾 勝、地方分権改革、東京大学出版会、2007、 2600 円

戦後日本の地方制度論から始め、第一次分権改革、第二次分権改革を詳論。

今村都南雄、官庁セクショナリズム、東京大学出版会、2006、 2600 円

行政改革、地方分権の流れを、地方分権委員会でのご自身の苦労話も含めて解き明かしたものの。

淡路剛久監修、寺西俊一・西村幸雄 編、地域再生の環境学、東京大学出版会、2006、3500 円

本間義人、土木国家の思想 都市論の系譜、日本経済評論社、1996、 3399 円

中央集権的な土木国家体質がどのように形成されてきたか、戦前戦後を通じたその形成史を考える。

生存科学シリーズ、公人の友社

特に、

千賀裕太郎企画、風の人士の人 地域の生存とNPO、1400円

未来への卵 新しいクニのかたち 上越後山里ファン倶楽部の軌跡、上越後地域資源機構(株)、3000円

関原 剛氏の率いる上記NPOの6年にわたる桑島谷の人々と溶け込んだ取り組みの軌跡を集約。過疎化、広域合併、平成大不況の中で、地域NPOによるクニづくり論を含む。土山希美枝、市民と自治体の共同研修ハンドブック、公人の友社、2008、1600円(DVD付き)

龍谷大学地域人材・公共政策開発システム オープン・リサーチセンター(LORC)の企画による、地域が元気になる「パートナーシップ」作りのための、ワークショップのマニュアル。

### 近代化の歩み・技術と人間・人間の未来を考える

河原 宏氏の本：

<新版>日本人の「戦争」 古典と死生の間で、ユビキタ・スタジオ、2008(旧版は1995)、1700円

早稲田大学名誉教授の氏は今年81歳。「私が目指したのは、あの「戦争」を情と理を兼ね備えた立場と姿勢で捉えようとする事だった。」と1995年刊行の築地書簡からの本書の初刊を振り返る。

空海 民衆とともに 信仰と労働・技術、人文書院、2200円

「従って、いつの時代にも労働と技術が意味を持つのは次の二つの条件を満たした場合である。一つは、それができるだけ多くの人の生活に利便と幸福をもたらす場合。もう一つは、それが未来の大きな希望の実現に繋がると思われるときである。言い換えれば、一方は日常の実利。他方は高遠な理想。人の労働と技術は、子のるたつを動じに満たすとき、人間のあり方、人生の意味と繋がってくる。」p. 98

佐伯啓思、20世紀とは何だったのか「西欧近代」の帰結、PHP新書301,740円

ニヒリズムの上に立つ現代文明を総合的に解き明かす。

真弓常忠、古代の鉄と神々、学生社、1997、2200円

「古来「神の田圃」と称して、葦や菅や萱等の茂る失言を聖書として祭っている例は少なくない。菅生神社、菅原神社、葦神社等、全国にそれを偲ばせる神社も少なくない。金井典美氏はそれらを取り上げて、「湿原祭祀」の諸形態をとかれている。「葦原が豊かな瑞穂国に変わってゆくという神話の複線であり、巨視的に見れば事実の反映」と解されているが、葦の生える湿原に鉄が得られ、それが文字通り稲の生育を約束するものであったという事実への視点は欠落している。湿原聖地は、そこに生育する水辺の植物の根に褐鉄鉱(スズ)が生成されたのである。その生成を祈念して、同類を模造して振り鳴らし、また地中に埋祭したのが、鉄鐸であり銅鐸であった。」p. 234。現代を考えていくための古代

史観。祭祀の持つ意味の重要性を説く。同時にすばらしい謎解きの本。

内山 節、自由論 自然と人間のゆらぎの中で、2500 円

現代人と自由の錯覚の現状と経緯を深い立場から論ずる。人間を内山氏のような目で見ていかないと、未来はないのではないか？

大橋 力、音と文明 音の環境学ことはじめ、岩波書店、2003、4400 円

芸能山城組組長でもある著者の、20kHz 以上の聞こえない音が脳を活性化するという画期的発見に基づいて、「音」と人間のかかわりから文明史とこれからの人類の進むべき方向を考える。

ルイス・マンフォード・生田 勉訳、都市の文化、鹿島出版会、1974(原著：1938)、4800 円

20 世紀のアメリカ都市文化の大爆発、地域の変貌等についての深い観察に基づく、「技術と文明」(1934)に続くマンフォードの都市論、文明論、地域論の大著。

中村良夫、クルマよ、何処へ行き給ふや あるエンジニアによる哩石の記、グランプリ出版、1989、1700 円

昭和 17 年東大工学部航空工学科を卒業し、中島飛行機・陸軍航二研にてジェットエンジン、ネ 130 の開発にも携わった著者の、戦中戦後の体験、昭和 31 年以降の本田技研工業での活躍から、日本の自動車産業の形成過程を知ることができる。

アンナ・ブラムウエル・金子 務(監訳)、エコロジー 起源とその展開、河出書房新社、1992、3800 円

エルンスト・ヘッケルに始まるエコロジーの流れとその思想的・政治的な展開を歴史的に振り返る。